

## ARCHAEOLOGIES 2.1

### ABSTRACTS

---

#### 論文

##### カドー遺産の再発見

Robert Cast, Timothy K. Perttula, Bobby Gonzalez, and Bo Nelson;  
Caddo Nation of Oklahoma and Archeological & Environmental  
Consultants, LLC

#### 要旨

本論の目的は、部族の統治と考古学的地域共同体間の関係の重要性を示すことである。このことに関連することの一つは、アメリカ先住民墳墓保護返還法(NAGPRA)の主張を詳細に検討することである。カドー先住民にとって、考古学者との共同作業は、NAGPRAによって定義された人骨、それに関連する副葬品、関連しない副葬品、祭祀に利用された遺物、文化的に世襲されてきた道具などに対して彼らがもつであろう主張を必ず力づける方向に働く。

##### 世界の周縁における夢とその他のオードハムの歴史が喚起するもの

Chip Colewell, American Academy of Arts and Sciences

#### 要旨

オードハムの人々、トノホ・オードハム、アキメル・オードハムは、北アメリカグレートサウスウエストの不毛な砂漠の中で長い歴史を持っている。オードハムの古老や文化アドバイザーとともに進めている歴史民俗学の共同プロジェクトを通して、古くからの先祖代々の土地が今日のオードハム経験の根幹の部分となすということを示す。もはやオードハムの子孫によって統制されていない伝統的な地域であるサンペドロ川流域に焦点を当ててみると、アメリカ先住民と彼らの祖先が形成してきた物質的ランドスケープを結びつける複雑な関係について知ることができる。先住民の遺産のコンテキストのなかで、先住民の主張とその高まりは文化遺産経営のなかで複数の利害関係者とのバランスが必要であり、これらの問題は重要性と緊急性を帯びている。私が主張するのは、研究者は彼らが何について語っているかだけでなく、我々の現代世界についてこの遺跡や遺物が何を語っているのか、遺跡と遺物についてより理解して

いくことが必要である。

(キーワード

オードハム、歴史民俗学、遺産、考古学的ランドスケープ、サンペドロ川流域)

**共有地の分割：南アフリカにおける文化遺産ランドスケープの政治的経済活動**  
Alinah Kelo Segobye, University of Botswana

要旨

南アフリカの文化遺産が、アイデンティティを構築する点において、不協和音が響く遺産やその管理がより組織的緊張をどのように反映しうるのかについていくつかの洞察を与えている。そのような衝突の原因のある部分は、過去が社会の中でどのように構築されてきたかということにある。長く続いている資源、特に土地をめぐる主張は、今日の南アフリカにおける文化的ランドスケープとの結びつき、価値と利用にはっきりと見ることができる。ボツワナや南アフリカにおける遺産の土地の利用や先住性に関する議論は、研究者や遺産に関しての専門家がまだ、過去について、特にどのように過去が公的消費に充てられているのかについて記述することに関与しなければならないことを示唆する。このディスコースは、先住民考古学者とそれ以外の考古学のグローバルなディスコースというコンテキストの元で検討される必要がある。アフリカの研究者は、彼らが研究する地域の政治的経済が、過去に対する人々のアクセスにどのようなインパクトを与えるかについての経験を共有することができる。同様に、専門家やアフリカ社会が直面しているいくつかの挑戦に対する世界考古学の意識は、遺産と市民の保護に際して、将来も大志と高潔さをもって警鐘を鳴らしていくことができるだろう。

**マヤ考古学とグアテマラにおける現代のマヤの政治的文化的アイデンティティ**  
Avexnim Cojti Ren, First Nations University of Canada

要旨

植民地化はマヤの人々を、グアテマラの経済的・社会的・政治的・文化的活動領域において、ラディノの人々よりも低い地位に追いやった。この経験は、ラテンアメリカにおける他の先住民族の経験と同様である。他の先住民のようにマヤの人々は不当な立場を克服するため、新しい戦略をどの世代もが打ち出し、発展し続けてきた抵抗の歴史を持っている。

考古学は、マヤの地域共同体の本質的利得にも、不利益な固定観念の形成にも

使われうる。グアテマラでの研究を実践している考古学者には、彼らが研究する地域の住民にたいしてもっと倫理的になる必要がある。特にマヤの歴史についての解釈と理論の構築に関してそうである。マヤの人々は考古学によって生産された認識に影響を受け、歴史を通して彼ら自身のアイデンティティを形成する固有の権利を持っている。

## フォーラム

### 批判的個人的観点からの世界考古学会議

Pedro Funari, Campinas State University, Brazil

#### 要旨

本論では、世界考古学会議(以下WAC)の形成につながった認識論的政治的コンテキストと、その後の展開について論じる。WACは倫理規範、地域の先住民の代表といったような一連の革新的政治的立場とり、考古学を新しい世界的段階に発展させた。WACの前事務局長として、WACという組織の民主的特徴の深化を論じる。

### 差異の賞賛

Robin Torrence, Australian Museum, Sydney

#### 要旨

大規模な会議という点は、世界考古学会議を定義する不可欠な要素である。議論と混乱にも関わらず、幅広い見識と観点を共有するため、幅広く構成された人々を団結させることに成功してきた。しかしながら時が経過し、私はWACが別のアプローチを求めるべきではないかと考えている。私はWACが地域的で小規模な多様な集会をサポートすることにより多くの努力を注ぐことを提案する。なぜなら、そのような集会はより広範な人々を巻き込み、多様性を促し、協力で生産的な相互作用を助長する潜在性があるからである。

### 解放する考古学 解放考古学と世界考古学会議

Larry Zimmerman, Indiana University-Purdue University Indianapolis and the Eiteljorg Museum

#### 要旨

世界考古学会議(以下WAC)は何よりも、考古学は客観的で政治に無関心だとしたプロセス考古学の主張に挑戦した。そのプロセス考古学は、先住民とそ

の祖先の人々の人間性を剥奪する傾向にあったため、先住民を疎遠な関係にした。WACは、考古学はどの過去の構築と利用にも考慮されなければならない政治的コンテキストの認識を中心においた。また、過去が他者によって広く発掘、解釈、所有された人々の声を表明する組織を構成させた。WACはさらに先住民や他の祖先達の地域社会との直接的な協力を主張した。実質的にはWACは、この論文で簡潔にその歴史を示したように、考古学を科学的な植民地主義の実践から解放しようとしてきた。仕事はまだ残っている。考古学者は、注意深く協力についての認識論を考え、そのプロセスの中で生み出される過去への理解に対する私たちの理解にとってそれが何を意味するかを考える必要がある。より困難な課題は、考古学者と彼らが研究している地域社会が、共同体の構築と文化的アイデンティティの維持にとって考古学がいかに重要であることを確かに理解するということである。